

もからもこれい添り寄

東日本大震災6年2カ月

釜石山林火災 大槌の元持さん(NPO事務局長)支援

東日本大震災の支援の輪が釜石市の山林火災で再び広がっている。大槌町のNPO法人つどい事務局長の元持幸子さん(42)は10日、同市平田の避

避難所訪れ体操指導

難所を訪れ、住民の健康確保のため体操指導を行った。震災後、国際医療援助団体AMDA(アマダ、岡山市)に所属し、緊急医療チームと地元関係者との調整員として本県被災地で支援活動に携わった経験がある。11日で震災から6年2カ月。「寄り添いたい」との思いで親身に励んだ。



気分転換「取り入れて」

元持さんは10日午前10時ごろ、AMDA本部職員の看護師橋本千明さん(37)と旧釜石商高の避難所を訪れた。現地に詰めている保健師から「避難生活が3日目。同じ体勢で長時間過ごす人が多い」と話を聞き、体操による気分転換を提案した。

子どもや高齢者ら12人が輪になり、手首や肩を回したり、腰をひねるなど体を動かしてリフレッシュを図った。尾崎白浜地区から避難した本間キヨさん(80)は「避難所で座りっぱなしだった。久しぶりに体を動かして軽くなった」と笑顔を見せた。

震災当時、仙台市の仙台医健専門学校で教員をしていた元持さんは、同市の避難所で友人と再会した。友人はAMDA職員として派遣されており「釜石市、大槌町にも支援に入りたい」と説明。元持さんは「現地

調整員として力を貸してほしい」と依頼され、引き受けた。

大槌町大槌出身の元持さんは実家と連絡が取れない不安を抱えながら、本県被災地入り。高台の実家は難を逃れたが、変わり果てた風景にぼつぜんとした。避難所や在宅避難者を回り、必要な物資や医療サービス

急医療チームに伝えた。

4年ほど活動したAMDAを退職し、同NPOを設立。現在は古里大槌でコミュニティ再生を目指し、イベントやセミナーを開いている。「釜石の皆さんは震災に続き、不便な生活を強いられている」と元持さん。「避難所では足腰が弱るので、短時間でもいいので体操を取り入れてほしい」と気遣う。

旧釜石商高避難所で体操指導を行う元持幸子さん(左から2人目)。震災支援のノウハウも生かし、避難者に寄り添う10日、釜石市平田